

京都産業大学『授業改善のヒント』作成の経緯と工夫

井 奥 成 彦

(慶應義塾大学文学部)

Circumstances and Devices in the Process of Editing “Jugyo Kaizen no Hinto (Hints to Improve Your Lectures),” Published by Kyoto Sangyo University

Shigehiko Ioku

(Faculty of Letters, Keio University)

Summary

Now, faculty development activities are being conducted at various universities, but it's rare to publish handbooks on tips or hints for improving lectures. In this regard, the Kyoiku Ekuserensu Shien Center (a center in support of excellent education) at Kyoto Sangyo University created a handbook titled “Jugyo Kaizen no Hinto (Hints to Improve Your Lectures)” in January this year.

Many difficulties and devices were experienced in the process of editing this handbook. As the first step, we conducted two questionnaires in autumn 2003 to find the devices used in the lectures. From the responses to the questionnaires, we chose positive examples to create the handbook. Based on these examples, we wrote manuscripts in conversational style. These works were very hard for us, because we had no experience in such an endeavor.

The process of making the handbook had beneficial effects on each professors' faculty development performance before publishing. We would be happy to be of service to any university professor through our research.

キーワード：FD、京都産業大学、ハンドブック、授業改善、アンケート

Keywords: faculty development, Kyoto Sangyo University, handbook, improvement of teaching, questionnaire

はじめに

現在、日本の各大学でさまざまなかたちでFD活動が展開されているが、大学での授業の秘訣ないしヒントを具体的にまとめたハンドブックを刊行した例はさほど多くない。管見の限りでは、名古屋大学や山形大学の例が見られる程度である¹⁾。これらの成果はいずれもすぐれたものであり、あげられている事例には普遍性を持つものも少なくないが、何もかもがそのままこの大学、どの授業にでも当てはめることができるかということ、そういうものでもない。地域差、学生の質の差や気質の違いといったものがあるからである。例えば私語のあり方や程度は大学や授業によってまちまちであろう。都会の大学と地方の大学でも違うだろうし、国公立大学と私立大学でも違うだろう。また大学の規模の大小、受講生の多い少ないによるところも大であろう。特に国立大学とは学生の質が異なり、大人数の授業の多い私立大学では、私語対策は国立大学とはまた違った手段が必要となろう。そういったことを考えると、各大学それぞれの実状に応じたハンドブックがあってもよいのではなかろうか。京都産業大学ではそのような観点から、独自のハンドブック『授業改善のヒント』を作る計画が立てられ、それがこのたび実現した²⁾。本稿ではその計画から実現までの経緯と工夫を紹介しようとするものである。各方面でのFD活動の参考となれば幸いである。

本論に入る前に、京都産業大学でのFD活動の概要と、その中での『授業改善のヒント』の位置づけについて述べておきたい。京都産業大学（以下「京産大」）では平成15年4月、「教員の教育能力を高め、ファカルティ・ディベ

ロップメント (FD) 活動を支援し、教育の質のエクセレンス化を図ること」を目的に、「教育エクセレンス支援センター」(以下「センター」) という機関が設置された³⁾。この種の機関の設置は、他大学に比べて決して早いとは言えないし、またこの機関には専任教員が1人もおらず、各学部などから出された合計12名の「FD 委員」から成る「FD 推進委員会」(以下「FD 委」) が同年5月に発足し、事務局職員に支えられつつ活動を推進するという、高等教育の専門家のいない、素人ばかりの集団であるが、これまで約3年間、さまざまな活動を精力的に展開してきた。具体的には、①学生による「授業の相互評価」アンケート⁴⁾ ②教員相互による授業参観「公開授業」③京産大ティーチング・ティップス集『授業改善のヒント』の刊行④教育講演会の開催⑤研修企画(新規採用教員のためのFDワークショップの開催)⑥教育プログラム支援制度⁵⁾などの事業を、各担当のワーキング・グループを通して行ってきた。それらの結果や途中経過の概要は『教育エクセレンス News Letter』⁶⁾(以下「News Letter」)に掲載されているので、参照されたい。これらの事業のうち、本稿では③を取り上げるわけであるが、これは後にも述べるように、上記FD事業の中でも教員の間で最も期待された事業であり、かつ費やす時間と労力という点において、これまでの京産大でのFD事業の中で最も力を入れて行った事業となった。

1. 『授業改善のヒント』作成の経緯

名古屋大学や山形大学の先例に倣い、京都産業大学でもティーチング・ティップス集を作成しようという考えは、FD委発足当初から出されていたが、その具体化の方法についてはまともなものでなかった。そんな中、FD委ではその年の秋に、全学教員を対象として二度にわたって「FDアンケート」を行った。その目的の一つは、上記「先例」により世に出されていた授業改善の事例以外に、約300人の京産大専任教員の授業の中にさまざまな「工夫」が埋もれていないか、京産大特有の問題点はないか、発掘することであった。

第1回目のアンケートは平成15年10月15日から11月7日にかけて、FDに対する基本的な意識や考えを、主として13の小問に対して選択肢で、匿名で答える方式で行われた。具体的には、教育能力を構成する主要な因子は何だと思うか、授業運営に関する技能を構成する主要な因子は何だと思うか、学部及び個人での教育能力開発(FD)の現状はどうか、教育能力開発を推進するためのプログラムとして重要だと思うものは何か、教育能力開発と「授業の相互評価アンケート」を関連させるべきか否か、教育能力開発を推進するうえで参考にすべきと思われる機関は何だと思うかなどを、いくつかの選択肢をもって問うている⁷⁾。

このアンケートには全教員(284名)の43%に当たる122名から回答が寄せられた。ここでこのアンケートの結果について詳細に立ち入ることは本稿の趣旨からそれることになるので省くが⁸⁾、本稿に直接関連する「FDを推進するためのプログラムとして重要だと思うものは何か」という問いについてだけ触れておくと、選択された選択肢(複数選択可)のうち最も多かったのが「ティーチング・チップスの編集・発行」で、47%であった。それに次いで「公開授業の実施」が46%、以下「情報機器利用開発」37%、「新任教員研修プログラム」28%、「講演会・フォーラム・シンポジウムの開催」25%と続く⁹⁾。このように、京産大独自のティーチング・ティップス集(ハンドブック)の作成は、当初から多くの教員の要望があったのである。

さて、第2回目のアンケートはその直後の11月19日から12月5日にかけて、日々の授業についての具体的な工夫について、記述式で回答する方式で行われた。このアンケートでは明確に「本学の〈ティーチング・チップス集(より良い授業実施のための秘訣集)〉作成に向けた基礎資料」¹⁰⁾とすることを謳っている。具体的な質問内容は以下の通りである。

資料1 京都産業大学第2回FDアンケート質問内容¹¹⁾

(前文略)

1 授業計画について

- (1)シラバスを作成する際、どのようなことに注意されていますか？
- (2)教材の選定の際、どのようなことに注意されていますか？

2 日々の授業について

- (1)授業の組み立てについて、どのような工夫をされていますか？

- (2)話し方について、どのような工夫をされていますか？
- (3)板書について、どのような工夫をされていますか？
- (4)情報機器を利用した授業で、どのような工夫をされていますか？
- (5)その他授業方法について、どのような工夫をされていますか？

3 学生の参加を促すためのスキルについて

- (1)学生とのコミュニケーションを図るために、どのような工夫をされていますか？
- (2)私語対策について、どのような工夫をされていますか？
- (3)グループ学習について、どのような工夫をされていますか？
- (4)ディスカッションについて、どのような工夫をされていますか？

4 授業時間外の学習について

- (1)学生に予習をさせるために、どのような工夫をされていますか？
- (2)レポート等の課題について、どのような工夫をされていますか？
- (3)オフィス・アワーを開設している場合、どのようなことに役立っていますか？
- (4)メールを利用されている場合、どのように活用されていますか？
- (5)上記以外に工夫されていることがあれば、お書き下さい。

5 成績評価について、何か工夫されていることがあればお書き下さい。

6 受講生の多様性について

- (1)学力のレベルに大きな差がある場合、工夫をされていることがあればお書き下さい。
- (2)留学生について、工夫をされていることがあればお書き下さい。
- (3)その他学生の多様性について、工夫をされていることがあればお書き下さい。

7 その他、成功例、失敗例、困ったことなどがあれば、お書き下さい。

(以上が主要な質問内容で、アンケートはこの後、FD委への意見・要望・提案等があれば自由に書いてもらう欄を設け、最後に回答者の年齢・京産大での教育歴・所属を、大まかに分類した選択肢によって聞いて終わっている。また記名・無記名は任意とした。なお、ここでは省略したが、設問2～5及び7については、授業の規模が受講生350人以上の特大クラス・100～350人の大クラス・100人未満の中小クラスのいずれなのか、また形態が講義・語学・ゼミ・その他のいずれなのかを明示した上で回答するよう求めた文が付随している。)

これには86名の教員から1000を超える事例が寄せられ、A4判で約60頁にわたってその全件を掲載した「京都産業大学第2回FDアンケート集計結果」(教育エクセレンス支援センターFD推進委員会、平成16年3月10日付)と、重複する事例を省いて500件余に整理した「京都産業大学第2回FDアンケート第1次報告書」(同委員会、同日付)とが作成された。そしてさらにそれらは主要な200の事例に絞られ、各質問項目ごとにFD委員がコメントを付けた「第2回FDアンケート回答に見る授業改善の工夫—第2回FDアンケート最終まとめ—」(同委員会、平成16年6月9日付)としてまとめられた。一例を示せば次のごとくである。なお枠内が委員がつけたコメント(まとめ)、枠外が掲載された事例である。

資料2 「第2回FDアンケート最終まとめ」より抜粋¹²⁾

2 日々の授業について

- (4)情報機器を利用した授業で、どのような工夫をされていますか？

授業形態に関わらず、一般的にパワーポイントとビデオ教材の利用が効果的と見なされている。また将来的にこれらの情報機器を利用しようと考えている教員もいる。他方、機器に「使われる」のではなく、「使いこなす」工夫が必要であるとの指摘がある。パワーポイントでは見やすさ、ノートをとる学生への配慮(提示の量・スピードなど)が求められ、ビデオでは流しっぱなしにせず適度に利用することが学生の集中力や関心の持続に必要であろう。

便利な道具は大いに使えばよいが、ただ忘れてはならないのは、授業において重要なのは道具・手段よりも中身ということである。いくらカッコいい道具を使っても、内容のない授業は存在価値がない。

- ・パワーポイントは40ポイントぐらいのフォントを使う。
- ・パワーポイントの表示は白地に黒より、青地に白い文字の方が見やすい。
- ・課題提出システムで欠席学生用の資料を配る。
- ・講義用のホームページを作る。

(以下略)

そしてここに寄せられた「宝の山」とも言える授業の工夫の数々が、京産大独自の授業改善ハンドブックとして教員がいつでも参照できるよう、『授業改善のヒント—京都産業大学の試み—』作成へと生かされていったわけである。

後になってみれば、この第2回アンケートでの事例の掘り起こしは、日頃さほどFDを意識していなかった教員にもFDを再認識させる、いわば意識の掘り起こしの効果があったように思われる。1000件を超える回答数がそれを物語っている。回答を寄せた教員の数こそ全体の3割程度にとどまるが、これは提出を任意とし、FD委側で強力に回収するようなことをしなかったため、多忙等による出し忘れなども少なからずあったためと思われ、FD委側で積極的な「取り立て」を行っていれば、回答はもっと集まったものと思われる。その意味で「意識の掘り起こし」は、数値では表せないが、回答を寄せた教員よりも確実に広い範囲に及んだことと思われる。

さて、このアンケートを承けて、平成16年度のFD委ではハンドブック作成のための作業部会（小池和彰部会長）と全体会議を繰り返し行い、その中で「会話形式」の採用などを決定し、同17年にかけてFD委による原稿の作成、「特色ある授業実例集」部分の原稿依頼と進み、17年10月に入稿、そして18年1月19日にハンドブック『授業改善のヒント』が刊行となったのである。その間の詳細については、次節で述べることにしよう。

2. 『授業改善のヒント』作成上の苦労と工夫

第2回アンケートから『授業改善のヒント』に至るまでの間には、担当ワーキング・グループ及びFD委においてさまざまな苦労があった。

先にも触れたように、一連の作業は、まず各設問ごとに寄せられた回答を整理することから始まった。複数の同じ内容、類似した内容の回答を一つにまとめたり、また文章表現に手を加え、正確でわかりやすい文章に直すなどした上で、各質問項目ごとに、回答に対するFD委としてのコメントを加え、前述の平成16年6月の最終報告書としてまとめたわけであるが、この間の作業はたいへん煩雑なものであった。

次に、これをいよいよハンドブックにつなげる段階になったわけであるが、その場合、冒頭で紹介したようなこれまで出された同種の書とは違った京産大独自の特徴を出そうと、京産大や同タイプの私大ならではの実状、問題や悩み、特に私大に特徴的な特大授業への対応ということなどを意識した内容にしようということになった。また形式面でも同種の書との差別化を図り、会話形式とすることとした。会話形式においては、老教授・中堅の助教授・若手の女性専任講師という3つのキャラクターを登場させ、日頃の授業について語り合わせる中に、前述のアンケートで得られた、日頃教員たちが行っているさまざまな「知られざる工夫」を盛り込んでいくというかたちにした。

登場人物のうち「老教授」は、教育よりも研究重視の姿勢を保ち続ける古いタイプの大学教員を代表させた。但しこのような教員が悪いとの立場をとっているわけではない。会話の中では、時に鋭い発言もある。「中堅の助教授」は研究よりも教育重視という時流に乗って、バリバリ仕事をこなす教員を代表させている。但しこのようなキャラクターが一方的に良いとの立場もとっていない。また「若手の女性専任講師」は教育経験が浅く不安を抱えているがITに強いという、今どきの若手教員を代表させている。京産大によくいるタイプの女性教員でもある。このように、今日の大学教員によくあるキャラクター3つを設定した。このうち前二者は関西弁でしゃべらせ、関西人の多い同大学教員にとって親しみやすく、読んでもらいやすくすることをねらった。この種の本が堅苦しい、とっつきにくいものになり、手にとって読んでもらえなくては意味がないと考えたからである。会話文はFD委のメンバーが分担して作成したが、このような作業に慣れていない委員にとっては、この作業もまたたいへんなものであった。

さて、このようにして完成した『授業改善のヒント』の構成は、次のようになっている。

資料3 『授業改善のヒント』の構成

第1章 変化することが求められている大学教員

1. 教育の重要性の高まり
2. 現代の大学生気質
3. 現在求められている教員とは？
 - (1)学生によりサービスを提供しよう (2)自分探しの援助者となろう (3)客観的な評価をしよう

第2章 授業を改善するには

1. 授業を計画しよう
 - (1)シラバスを作ろう (2)教材を選ぼう
2. 授業をしよう
 - (1)授業を組み立てよう (2)話し方に注意しよう (3)板書に注意しよう (4)情報機器を利用しよう
3. 学生の参加を促そう
 - (1)学生とコミュニケーションをとろう (2)私語に対処しよう (3)グループ学習をしよう (4)ディスカッションをしよう
4. 授業時間外の学習をさせよう
 - (1)予習・復習をしよう (2)レポートを書かせよう (3)個人およびグループの発表の準備をしよう
5. 成績評価をしよう
 - (1)成績評価の基本原則とは (2)成績評価の実際 (3)成績評価で気をつけるべきこと
6. 多様な受講生に配慮しよう
7. 公開授業をしよう

第3章 授業の新しい試み (特色ある授業実例集)

1. 経済学教育における実験 (ゲーム) の利用
2. ビデオ教材による、税務会計の学習 (マルサの女をマルサする)
3. 大講義科目における Tips ~ Web 上で、教室で
4. ビデオ撮影を利用した実践的英語会話コース
5. グループワーク導入の試み
6. デイバートに特化した授業
7. PowerPoint 教材による授業の一つの試み

参考文献、索引

(B6 判、全111頁)

第1章で最近の学生気質の変化と、それに対し大学や教員の側でどのように対処すべきかについて触れ、第2章は「第2回アンケート」にほぼ沿ったかたちで構成し、第3章では会話形式ではなく、何人かの教員に「特色ある授業の実例」を書いてもらった。

この構成を先行事例と比較すると¹³⁾、最近の時流や学生気質の変化への対応について述べた部分に1章を割いていることが本書の構成上の一つの特徴となっている。冒頭で述べたような問題意識がこういったかたちでも現れている。第3章の「実例集」は山形大学の例に倣った。また第2章で具体的に挙げた事項 (例えばシラバスの書き方とか教材の選び方、板書のしかた、話し方等々) は先行事例と大差ないが、その取り上げ方や対策という点では、先行事例にない、ユニークな面が多々見られる。ここでその一つ一つについて詳細に紹介する余裕はないが、一例として、冒頭で触れた私語対策について取り上げてみよう。

私語対策は一般的には「学生に (私語は) ルール違反であることを伝える」あるいは「それを許さないという姿勢を示す」¹⁴⁾ といったところが相場であろうが、本書では、第2回アンケートの回答を参考にし、そのような対策以外

に「最近の学生は90分の授業に耐えられないという話もちょうくちよく聞きますし、“ネタ”をまぜるなど、学生を飽きさせない工夫も必要やと思います。」¹⁵⁾とか「怒鳴るとクラスの雰囲気が悪くなるので、私語対策は授業の合間におしゃべりタイムをもうけるなどの別の方法にトライしよう。」¹⁶⁾などとしている。最近の学生の気質の変化や、関西の学生が中心の、中位の私学という状況の中では、こういった考え方も出てくるのである。

また表紙及び本文中のイラストを学内(私のゼミ)のデザイン部の学生に依頼した。すでに山形大学のハンドブックでもイラストに学生を起用しているが、これも手作り感を出してできるだけ読みやすい、親しみやすいものにするという意味では有効であったと思う。また経費の節約という意味でもよかった。

おわりに～『授業改善のヒント』作成過程におけるFD効果～

以上のような本書を刊行したことにもし意義があるとすれば、次のようにまとめることができようか。まず第一に、これまで国立大学がリードしてきたと思われる授業改善法の開発に対し、私大初のハンドブックとして特大授業など私大に特徴的な問題を取り上げ、さらに最近の学生の気質の変化をもふまえて対応策を示していること、第二に、特定の間もしくはグループによる仕事ではなく、アンケートを通して学内の声を広く反映し、学内の教員全体の所産となっていること、第三に、会話形式というユニークな方法を通して親しみやすさ、読みやすさを出したこと、第四に、学内の学生にイラストを依頼するなどして手作り感を出したこと等である。

『授業改善のヒント』はまだ完成したばかりであり、学内の教員に配布したとはいえ、この書による効果がいかにどうか、前述のような工夫は功を奏したか、といったようなことはもう少し時間が経ってみなければわからない。これらについては、センターによっていずれ何らかのかたちで総括がなされるであろう。しかし図らずも、ここに至るまでの間にすでに相当なFD効果があったように思われる。そのことは、まずアンケートに寄せられた回答の膨大さに端的に表れている。またそれらを整理しまとめる作業、及びその過程での議論は、たいへん煩雑ではあったけれども「素人集団」であるわれわれFD委員にとってもよい勉強となった。すなわち、完成されたハンドブックを配布することからFDが始まるのではなく、アンケートからハンドブック刊行に至るまでの過程そのものが、回答を寄せたか否かに関わらず、教員にとって自己の授業のあり方をふり返り授業というものを考え直す、言いかえればFDというものを再認識するよい機会になったと考えられるのである。

最後に、今回のハンドブック作りは、広く教員に事例を求めたこともあり、これまでのところ「実感のこもった内容となっている」「私大教員のため息が聞こえてくるようだ」「センスの良い編集」などと好評をいただいているが、私なりの反省点としては、教員ばかりでなく学生にも学生向けのアンケートを作って意見を聞き、それも内容に反映させればもっと厚みのあるものになったのではないか、と思っている。教員サイドからの見方だけでなく、逆の立場からの見方も必要なのではないかということである。例えば、教員の考える「良い板書のしかた」と学生の考えるそれとは必ずしも一致しないかも知れない。話し方や情報機器の使い方にしても然りである。今後この種のハンドブックを作る向きは、こういったことも考慮に入れていただければと思う。

註

- 1) 池田輝政・戸田山和久・近田政博・中井俊樹2001『成長するティップス先生』玉川大学出版部、授業改善ハンドブック編集委員会編2003『あっとおどろく授業改善—山形大学実践編—』山形大学教育方法等改善委員会。
- 2) 2006年1月19日刊。
- 3) 平成15年4月1日制定「京都産業大学教育エクセレンス支援センター規程」第2条。
- 4) 京産大ではセンター設置以前から、教務部主催で学生による授業アンケートを行っていたが、平成16年度よりセンター主催となった。
- 5) 京産大の教育プログラム支援制度とは、すぐれた教育プログラムをつくった教員もしくは教員のグループに、その教育を推進するための助成金を与える制度で、平成17年度より開始された。センターは申請されたプログラムを審査し、採否を決定する。
- 6) 『教育エクセレンス News Letter』は平成18年12月1日までに第12号まで刊行されており、Web上でも公開さ

れている (<http://www3.kyoto-su.ac.jp/outline/excellence/excellence01.html#03>)。

- 7) 平成15年10月8日付「第1回FDアンケートのお願い」(教育エクセレンス支援センターFD推進委員会)。
- 8) 詳細を知りたい方は「News Letter」第2号(平成16年3月)を参照されたい。
- 9) 教育エクセレンス支援センターFD推進委員会2004「第1回FDアンケート調査の結果について」『教育エクセレンス News Letter』第2号、5頁。
- 10) 平成15年11月12日付「第2回FDアンケートのお願い」(教育エクセレンス支援センターFD推進委員会)。
- 11) 同前。
- 12) 平成16年6月9日付「第2回FDアンケート回答に見る授業改善の工夫—第2回FDアンケート最終まとめ—」(京都産業大学教育エクセレンス支援センターFD推進委員会) 6頁。
- 13) 構成のみにとどまらず、内容にまで踏み込んで先行事例と比較検討することは有意義だと思うが、本稿の目的は「経緯と工夫」の紹介であるし、そのような作業は客観的に見られる立場の方にやっていただく方が望ましいと考えるので、ここでその問題に深入りすることは避ける。
- 14) 前掲『成長するティップス先生』82頁。
- 15) 京都産業大学FD推進委員会(編)2006『授業改善のヒント—京都産業大学の試み—』京都産業大学教育エクセレンス支援センター、21頁。
- 16) 同前52頁。

付 記

本稿は、筆者が前任校の京都産業大学在籍中に同僚とともに取り組んだFD活動の一端を、平成18年3月27・28日に京都大学において開催された第12回大学教育研究フォーラムにおいて、当時同大学教育エクセレンス支援センター副センター長であった立場から同僚を代表して発表した内容をまとめたものである。なお『授業改善のヒント—京都産業大学の試み—』は市販してはいないが、入手を希望する方は、同大学教育エクセレンス支援センターに連絡していただければ可能な限り応じてくれるはずである。